L3T/L3TK/L3TF

本科１期５月度

解答

Ｚ会東大進学教室

難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

4章

【問題】（演習）

出典…『帰田録』　／　千葉大学・04年

書き下し文

陳康肅公堯咨は射を善くし、当世無双なり。公も亦此を以て自ら矜る。嘗て家圃に射る。売油翁有り、担を釈きて立ち、之を睨ること久しくして去らず。其の矢を発するに、十に八九を中つるを見て、但だ微かに之に頷くのみ。康肅問ひて曰く、「汝も亦射を知るか。吾が射亦精ならずや」と。翁曰く、「他無し。但だ手の熟せるのみ」と。康肅忿然として曰く、「爾安んぞ敢へて吾が射を軽んずる」と。翁曰く、「我が油を酌むを以て之を知る」と。乃ち一葫蘆を取りて、地に置き、銭を以て其の口を覆ひ、徐に杓を以て油を酌み之を瀝らす。銭孔より入り、而も銭は湿はず。因りて曰く、「我も亦他無し。惟だ手の熟せるのみ」と。康肅笑ひて之を遣る。

現代語訳

陳康肅公堯咨は弓術に長けていて、当時並ぶ者がいなかった。公自身もまた弓の技量を誇りにしていた。ある時（公が）家の外にある弓の練習場で弓を射ていた。（そこへ）油売りの年寄りが通りかかり、担いでいた荷物を下ろして、立ったまま長い間この様子を見つめ、立ち去ろうとしなかった。公が矢を射ると、十本のうち八、九本が命中するのを見て、（年寄りは）ただかすかに頷くだけであった。康肅が（年寄りに）尋ねて言った、「おまえも弓の心得があるのか。（あるならばなおのことよくわかるであろう。）私の腕前はなんとすぐれたものではないか」と。（ところが）年寄りは言った、「別にどうということはない。ただ手が慣れているだけだ」と。康肅は腹を立てて言った、「おまえはどうしてよくも私の弓の腕前を馬鹿にするのか」と。年寄りが言った、「自分が長年油を酌んでいることからわかるのです」と。そして一つの瓢箪を取り出して、地面に置き、（穴の開いた）銭でその口をふさぎ、ゆっくりと杓子で油を酌んでしたたらせた。（油は）銭の穴を通って入り、しかも銭は濡れなかった。そこで（年寄りは）言った、「わしもまた、別にどうと

いうことはない。ただ手が慣れているだけです」と。康粛は笑って（年寄りを）行かせた。

解答

問1 私の弓術の腕前はなんとすぐれたものではないか。〔解答例〕

問2 なんじいずくんぞあえてわがしゃをかろんずる（か）。

問3 油を売る老人の油を操る巧みな技を見て、自身の弓術の技量も老人の言う通り単なる習熟の結果に過ぎないということを悟ったから。〔60字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…秦・呂不韋『呂氏春秋』「別類篇」　／　お茶の水女子大学　98年

書き下し文

高陽応将に室家を為らんとす。匠対へて曰はく、「未だ可ならざるなり。木は尚生なり、塗を其の上に加ふれば、必ず将に撓まんとす。生を以て室を為らば、今善しと雖も、後将に必ず敗れんとす」と。高陽応曰はく、「子の言に縁れば、則ち室敗れざらん。木は益々枯るれば則ち勁く、塗は益々乾けば則ち軽し。益々勁きを以て益々軽きに任へしむれば、則ち敗れざらん」と。匠人辞して対ふる無く、令を受けて之を為る。室の始めて成るや善く、其の後果たして敗る。高陽応は小察を好み、大理に通ぜざるなり。

現代語訳

高陽応は家を建てようと思った。（ところが注文を受けた大工の）職人が（高陽応に）お答えして言うには、「まだ（お屋敷を建てるのに）よろしいようになってはおりません。（建材として御指定の）材木がまだ生で（柔らかい状態でございま）して、（壁や屋根を固める）泥をそ（の生木の骨組み）の上に塗り重ねましたら、きっとそのうち（材木が）歪み曲がってしまいましょう。生木を使ってお屋敷を造りますと、建てあがったばかりのときは上出来だとしましても、後になってきっと必ず壊れてしまうにきまっています」と。（それを聞いた）高陽応が言うには、「そなたの言うことをもとにすると、それなら屋敷は壊れないだろう。（生の材）木というものはどんどん枯れ（て水分が抜け）るにしたがって（いよいよ堅く）強く（なるものだし）、泥というものはどんどん乾くにしたがって（いよいよ）軽くなるものだ。ますます強くなる（材木）でますます軽くなる（泥）を支えさせるのだから、それなら（家が）壊れることはない（はず）だろう」と。職人は（それ以上）言い募って反論する（言葉）もなく、（高陽応の）指示のとおりにそ（の屋敷）を造った。（そうして）屋敷が出来上がったばかりのときは素晴らしかったが、その後しばらくすると（職人の）言ったとおりに（屋敷は歪み、やがて）崩潰してしまった。高陽応は、好んで視野の狭い観察にこだわるばかりで、大局的な道理を弁えてはいなかったのである。

解答

問1　木材はまだ乾ききっておらず、泥をその生木の骨組みの上に塗り重ねると、きっとそのうち骨組みが歪んでしまうだろう。

問2　A＝こた　　B＝や

問3　ア＝善　　イ＝敗

問4　d

問5　視野の狭い観察を好むばかりで、大局的な道理はわかっていなかったのである。

解説

問1　返り点だけでなく送り仮名まで与えられているから、これも参考にする。「木」は、「為室家」の話題から考えて、「材木」・「木材」などとする。「樹木」ではないことがわかっているのを採点者に伝えるためにも、原文中の表現は可能な限り厳密に言い換える。

「尚」は「なほ」と訓読し、「やはりまだ」の意である。「生」は、あとの「撓」から考えて「なま」の意であると捉え、「建材として生」→「十分に乾いていない」と解釈する。また、「生なり、」と《連用中止法》で訓んであるので、「～であって」の意味に解釈するが、これは後で表現される予測の根拠となることだから、「～だから」と原因理由の形で訳してもよい。

「加」は続く「塗」との関連を考えると「塗り重ねる」ことを言うものとわかる。「塗」は訓読にしたがって「泥」で十分だろう。壁塗りのことだから気を利かせたつもりで「漆喰（しっくい）」などとする手もあり、これでも点数はくれるだろうが、漆喰とはもともと「石灰」のことだから本来は別物である。「其上」は、指示語「其」の指示内容を明示する。

「必ず」はそのままでもよいが、念のため言い換えておく。「将」は《再読文字》で、「近接未来・予想・予測」などの意がわかるように、ここでは再読文字の副詞的要素を「そのうち」と打ち出すとともに、文末を推量表現にする。「撓」は振り仮名で「たわむ」と訓めるが、訳に「たわむ」という言葉を使うのは「撓」の意味が理解できていない者にもできることだ。これもやはり類

義語に言い換えておこう。また、「撓」の主語が省略されているので、これも補っておくこと。

問2 **A** 「対」は漢文では「目上の者にお答えする」意味を持つ。「対曰」を「こたへていはく」と訓むのは常識中の常識。

B 「也」は文中に置かれると《強意》《整調》の助詞扱いとなり、「(〜する)や」と訓む。文頭・文中で名詞に続くと「(〜)や」となり、話題・主語を強調するようなことが多い。なお、「也」は文末に置かれることが多い助字で、そのときは《断定》で「なり」と訓むのが普通だが、述語が名詞でなければ訓まない人もいる。(たとえば、問題文1行目の「未可也」は「未」の送り仮名に「ル」があるので、出題者は「いまだかならざるなり」と訓ませたがっていることがわかるが、文末の「也」を無視してこれを「いまだかならず」と訓んでも意味は同じである。)また、述語が禁止などの場合(「無〜也。」といった場合)は訓みようがない。ただし、「也」は疑問文の文末にも置かれ、この場合は「や」(接続・口調によっては「か」)で訓読しないと《疑問》意が表現できない。

問3 空欄**イ**の主語は省略されているので、空欄**ア**と共通と考える。そうすると二つの空欄は「室」を主語としつつ「始成=**ア**」、「其後果=**イ**」とあり、「始」と「後」の関係から**ア**と**イ**は対立することがわかる。また、「果」に注目すると、その訓み「はたして」から、このことはあらかじめ予想・予測されていたことが暗示されているようだ。これらのことから、「室」について「できたばかりのとき」と「しばらくしてから」との状態に関する予想・予測されている表現を文中に求めると、前半の「匠」の言葉の中に「室を為らば(=仮定条件)、今善しと雖も、後将に必ず敗れんとす」が見つかる。「今」は仮定条件を受けるのだから、「現在」ではなく「そのとき」と考えるべきで、「家が建てあがったばかりのとき」を指していることになる。これが「始成」に対応する。また「後」はそのまま空欄**イ**の直前に対応している。したがって、「今=始=【善】、後=【敗】」の対応から空欄**ア**・**イ**を補充すればよい。

問4 各選択肢の「〜の言葉も言わずに/言えずに」は共通で、ほぼ傍線部の四語に対応している。ここで「言わず/言えず」の対立については、《可能》の助動詞(「能・得・可」など)が傍線部にないから「言えず」を排除してしまいたくなる。しかし、漢文では引き締まった簡潔な表現が好まれ、ここでも《用言否定》の「不」でなく本来は《存在否定》の「無」が否定を表しており、全体で「〜することがない」といった意味を示し、これを言い換えようとしているのだから、「言わず/言えず」程度の違いは日本

語での表現におけるニュアンスの問題になってしまう。軽々にcやdの選択肢を排除してしまうのは考えものである。（原文中に《可能》の助動詞が明確に表現されてあればそれを優先するのはもちろんのことだが。）

さてそうすると、各選択肢のはじめの言葉を吟味してゆくことになる。傍線部に先立って「高陽応」と「匠」との対話が見られる。ここでまず固有名詞で表現された「高陽応」はおそらくはそれなりに地位のある人物であり、一方、普通名詞の「匠」はおそらく「名もない」職人だったのだろうと当たりを付けておくとよい。その上で「辞而対」の字を見ると、「辞」には「言葉（を使って言う）」の意味があり、これが選択肢の「言葉も言わずに／言えずに」に対応するのだろうから、問題は「対」である。**問2**で見たように「対」には「目上の者にお答えする」意があり、これは二人の関係にマッチする。また、「対」には「対応・対話・対立」などの熟語があることも確認しておく。

さて、二人の対話を見ると、建材の性質や使い方に関する「匠」の説明を「高陽応」は真っ向から否定し去っている。自分の職域のことを否定された「匠」の立場としては、a「感謝」はありえない。また、結果的に「匠」の言葉が正しく、そのことは「匠」にはわかっていたはずなのだから、b「謝罪」も不適切だ。c「非難」はありそうなことだ。とりあえずそのままにしておく。d「反論」も「匠」としてはしたかったことだろう。e「承諾」はおかしい。このあとで「匠」は言われるままに屋敷を建ててやっているのだから、「承諾」はしてしまったことになり、その言葉を口で言ったかどうかは問題にならない。

そこで「非難」と「反論」のどちらをとるかだが、「非難」は単に「相手の欠点・間違いを指摘する」ことで、感情的なニュアンスを持ちやすいのに対して、「反論」は「自分の信ずる根拠にしたがって相手の理窟をうちまかそうとする」ことで、一般的には冷静かつ論理的に行われるものだ。ここで、「匠」は建材の扱いについては専門家だからその性質もよく知っていたのだが、「高陽応」に理屈で負かされている。あとになってこの理屈は実は「屁理屈」だったことがわかるのだが、この段階では身分の違いから「それ以上は言いようがなかった」のだと考える。「非難」では「匠」のほうに理のあることが表現しきれないが、「反論」ならそれが暗示できるので、cよりdが適切である。

問5　傍線部は「好」と「不通」、「小察」と「大理」で対応する対比表現である。まずは「而」のニュアンスを「～するが」・「～するばかりであって」などと表現して、前後を明確に対比することをおさえる。

次に「好」だが、素直に「～を好む」と訓んでもよく、入試の答案としてはそれで十分に得点が認められるだろうが、この語に

は「好んで～したがる」・「どうかすると～してばかりいる」といったニュアンスがあり、《現代語訳》のような表現にするとなおよいだろう。これに対して「不通」は「通じていない」→「十分に達していない」の意味で、「わかっていない・弁えていない」などと訳すとよい。「通じていない」のままでは書き下し文と同じ言葉になり、受験生の理解が十分かどうか採点者にはわからない。

「小察」については、「察」を「観察・洞察」と考えれば「高陽応」の推量のことをいうのだとわかるだろう。専門の職人もいちおうは引き下がらざるを得ないような、それなりの理窟には聞こえたわけだ。ところがこれは後になって机上の空論だったことが明らかになるのだから、「小」は「つまらない・役にも立たない・こざかしい」といった意味で用いられたことがわかる。《解答例》では「察」の意味に滑らかにつながるように「視野の狭い」と表現したが、先に述べたような言葉も許容範囲だろう。そしてこれと対応させれば、「大」は「ものを大きく捉える・重要な・包括的な」といった意味合いにとれるので、「大局的な」とした。また「理」も、「理屈」などとしてしまうとそれこそ「屁理屈」とのコントラストが薄くなってしまう。「すじみち」ではなく「ことわり」の意味を前面に打ち出すために、ここはどうしても「道理」としたいところである。

なお、答案の文末については「（～してい）ない」・「（～してい）なかった」などでもよいが、傍線部はこのエピソードに対する筆者のまとめとなっている。文末に《断定強調》の「也」があり、出題者が「不」に「ル」と送ってここを連体形で訓んでいることからも、「也」のニュアンスを活かして「（～してい）ないのだ」・「（～してい）なかったのである」などとしておくほうがよいだろう。

●メモ●

5章

【問題】（演習）

出典…『後漢書』「巻八四　列女伝、王霸妻」　／　東北大学　90年

書き下し文

太原の王霸の妻は、何の氏の女なるかを知らざるなり。霸少くして高節を立つ。光武の時、連に徵さるるも仕へず。霸の妻も亦た美しき志行あり。初め、霸同郡の令狐子伯と友たり。後に子伯楚の相と為り、而して其の子郡の功曹と為る。子伯乃ち子をして書を霸に奉ぜしむ。車馬服従、雍容如たり。霸の子時に方に野に耕す。賓の至るを聞くや、耒を投げて帰るも、令狐の子を見て、沮作して仰ぎ視る能はず。霸之を目て愧づる容有り。客去りて久しく臥して起きず。妻怪みて其の故を問ふ。始め肯へて告げず。妻罪を請ふや、而る後に言ひて曰く、吾子伯と素より相ひ若かず。向に其の子を見るに、容服甚だ光き、挙措適ふ有り。而るに我が児曹蓬髪歴歯たりて、未だ礼則を知らず、客を見て慙づる色有り。父子の恩は深し。覚えず自失せるのみと。妻曰はく、君少くして清節を修め、栄禄を顧みず。今子伯の貴きは君の高きに孰与ぞ。奈何ぞ宿志を忘れて児女子に慚ぢんやと。霸屈起して笑ひて曰はく、是れ有るかなと。遂に共に身を終ふるまで隠遯す。

現代語訳

太原郡の王霸の妻は、何姓〔＝誰〕の娘であるかわからない。王霸は若いころから気高い節操を固く守っていた。（後漢の）光武帝のとき、何度も（仕官を）求められたが、仕えなかった。王霸の妻もまた立派な心ばえと行い（の人）であった。前から、王霸は同じ郡の令狐子伯と友だちであった。後に子伯は楚（の国）の宰相となり、そして、その（子伯の）息子も郡の下級官吏となった。子伯は、そこで（我が）子に手紙を王霸のもとに届けさせた。（子伯の息子の様子は）（乗っている）馬車も（その馬車を引く）馬も（つきしたがう）部下たちも、ゆったりとしている〔＝いかにも立派である〕。王霸の子はちょうどそのとき畑を耕していた。客が来たと聞くと、

（すぐに）鋤を投げ出し家へ帰って来たけれども、令狐の息子を見ると意気阻喪して〔＝気後れして〕、面と向かって相手の顔を見ることもできなかった。王霸はこれを見て恥ずかしそうな様子をした。客が帰ると、（王霸は）永い間横になったまま起き上がらない。妻は不審に思って（王霸に）そのわけを尋ねた。（王霸は）始めのうちはどうしても言おうとしなかった。妻が（自分の）罪の許しを請う〔＝私に悪い所があればおわびしますから、どうかおっしゃってください〕というと、そうした後（やっと王霸が妻に答えて）言うことには、「私は以前から子伯にはまるでかなわない。さきほど子伯の息子を見たところ、その身なりは輝くばかりで、立ち居振る舞いも礼に適っていた。ところが、わが息子は髪はぼうぼうで歯も抜けてまばらになっており、まだ礼儀作法もわきまえず、客を見て恥ずかしそうな様子であった。父と子の情愛は深いものだ。（私は）おもわず取り乱してしまった」と。（それを聞いて）妻が言った。「あなたは若いときから清い節操を修め、地位や俸禄などには見向きもしませんでした。今、子伯さまの身分、地位の高さと、あなたの（節操の）高さとでは、どちらがまさっているでしょうか（、もちろん、あなたの方です）。どうして以前からの志を忘れて、女子（おんなこ）どもに恥じ入ったりなさることがありましょうか（、いいえ、そんなことはありませんでしょう）」と。王霸は起き上がり、笑っていうことには、「（まったく）そのとおりだ」と。こうして（二人は）共に死ぬまで隠遁生活をまっとうした。

解答

問1 a＝しきりに　b＝さきに　c＝いかんぞ

問2 こをしてしょをはにほうぜしむ

問3 吾与二子伯一素不二相若一

問4 子伯さまの地位の高さとあなたの節操の高さとではあなたのほうが優っています。〔解答例〕

問5 修清節不顧栄禄〔7字〕

問6 高位を望まず操を高く保つ決心を固めて迷いが晴れた気持。〔27字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…錢大昕『潛研堂文集』巻十七「奕喩」／北海道大学　91年

書き下し文

予奕を友人の所に観るに、一客数々敗る。其の算を失ふを嗤ひ、輒ち易りに之を置かんと欲す。以て己に逮ばずと爲せばなり。之を頃して客予と對局するを請ふ。予頗る之を易とす。甫て數子を下すに、客已に先手を得。局將に半ならんとして、予思ふこと益々苦しく、而して客の智尚ほ餘り有り。局を竟へ之を數ふるに、客予に勝つこと十三子。予赧づること甚だしく、一言を出だす能はず。後予を招きて奕を觀る者有れば、終日默座するのみ。今の學者古人の書を讀み、多く古人の失を呰る。今人と居るに、亦樂しんで人の失を稱す。人固より失無き能はず。然れども試みに地を易へ以て處り、心を平かにして之を度れば、吾果たして一失無からんや。吾能く人の失を知るも、而れども吾の失を見る能はず。吾能く人の小失を指すも、而れども吾の大失を見る能はず。吾吾が失を求むることすら且つ暇あらず、何ぞ人を論ずるに暇あらんや。

現代語訳

私が囲碁を友人の所で観ていると、ある客が何度も何度も負けた。（私は）其の〔＝何度も負けた客の〕計略の失敗をあざ笑い、そのたびごとに〔＝客の計略が失敗する度に〕（自分が）代わりにこれ〔＝碁石〕を打ちたいと思った。（その相手は）私にはかなうまいと思ったからである。これ（この対局）からややあって、（その）客が私と対局することを求めた。私は甚だこれ〔＝対戦相手〕を侮った。（対局して）はじめ、（相手が）数個（の碁石）を打って、ほどなく客は先手を取った。一局目の半ばになろうとして、私の考えはいよいよ苦しく、そうして相手の智恵はまだ余裕がある。一局を終えてこれ〔＝碁石〕の数を数えてみると、相手が私に勝ったのは十三子（の大差であった）。私は恥じてひどく顔を赤らめ、一言も言いだせなかった。（そうした）後、私を招いて（私が）囲碁を観戦することがあると、一日中黙って座っているだけである。今の学徒は、昔の人の書物を読んでは、昔の人の過ちを非難することが多い。今の人たちと（いっしょに）いると、また好んで人の過ちをあげつらっている。人間はもともと過ちのないものはいない。しかしながら、試しに（自分と相手との）立場を替えて置いて、心を平等に保ってこれ〔＝自分と相手〕とを計ってみると、私は果たして一つの

欠点もないであろうか（いや、そうではない）。私は他人の欠点を知ることができるが、しかし、自分の欠点を見ることはできない。私は他人の小さな誤りは指摘できるが、しかし、自分の大きな誤りは見ることができない。私は、自分の欠点を見つけ出すことすら（十分な）時間がない、ましてその上に、どうして他人（の欠点）を論ずる時間があろうか（いや、ない）。

解答

問1 われはたしていっしつなからんや。

問2 (1)＝そのたびごとに自分が代わって碁石を打ちたいと思った。
(2)＝私はひどく対戦相手を侮った。
(3)＝自分と相手との立場を替えて置いて

問3 自分より弱いと見下した碁の相手に大敗し、恥をかいた体験。〔28字・解答例〕

問4 他人の欠点は指摘しやすいが、自分の欠点は見えにくいことを肝に命じるべきである。〔39字・解答例〕

解説

問1 書き下し文の問題。（全文ひらがな）訓読を一定の型の中に入れてくれる、基本句形と重要助字に着目することから始める。
「吾」＝一人称の代名詞。「われ」。
「果」＝副詞として読む時は「はたシテ」と読んで、「思ったとおり。本当に。」の意。
「無」＝否定形。下の体言から返読して「――なシ」と読んで、「――がない。」の意。
「乎」＝この助字についての理解・判断が最大のポイント。文末にある時は、疑問・反語・詠嘆を表す。それらのどの意味を表しているかを文脈を視野に入れながら絞りこんでいく。
「人は他者の過ち・欠点を非難する。たしかに、人は過ちをなくすことはできないが、では、立場を替えて自分を見てみると、

どうか。」という、そこまでの文章の流れを考えると、ここは、「自分にも一失があるにちがいない」と主張しているはず。ということは、反語に読まなければならない。文末を「――ンや」で結ぶ。「無シ」を未然形にして接続させる。

ちなみに、疑問の場合は「なきか」、詠嘆の場合は「なきかな」と読む。

以上の理解を積み重ねて傍線(4)を訓読すると、「われはたしていつしつなからんや」となる。解釈は「私は、本当に、一つの誤りもないであろうか。いや少しの誤りはあるはずだ。」となり、先ほど検討した文脈に矛盾しない。

問2 現代語訳の問題。特に着目させられている「易」はもちろんのこと、基本句形と重要助字に注意しながら、一語一語の意味を丁寧に積み重ねていく。

(1) 「易」の意味を文脈から絞り込む。自分の目の前で囲碁を打っている人があまりに弱く、自分の方がずっと強いと思ったので、その人と「易(かわ)り」たいと思った、という流れ。「易りに」あるいは「易りて」と訓読する。

その他の語について理解を確認する。

「輒」＝「すなはチ」と読んで「そのたびごとに」の意。「欲」＝「――ントほっス」と読んで「――したいと思う」の意。

「置之」＝（注）にもあるように碁を打つことは「石を置く」という。

(2) 自分よりも弱いとみなしている相手と対局することになって、その相手を「易(あな)どった」、という流れ。「之(これ)を易(あな)どる」と訓読する。

「予」＝「よ」と読んで、一人称の代名詞。「頗」＝「すこぶル」と読む副詞で「かなり・非常に」の意。「之」＝ここは、指示代名詞の働きをしていて、「対戦することになった一客」を指す。

(3) 人は他者の過ちを非難しがちだ。たしかに、人は過ちをなくすことはできない。しかし、立場を「易えて」自分を見てみると……、という流れ。「地を易へて」と訓読する。

「地」＝見地。立場。「以」＝ここは接続の働きをしている。「處〈＝処〉」＝ある場所に落ち着く。

問3 冒頭の「予観奕」から「終日默坐而已」までが、囲碁にまつわる筆者の体験の部分。

傍観者として対局を観戦していた時の対局者への見方が、実際に当事者として対戦した時にどう変化したかをまとめる。「嗤」

「易」から「赧」への変化である。

問4　**問3**でまとめた囲碁にまつわる体験を次の「今之學者～稱人失」までの部分で、筆者のかかわっている学問の世界での場合に拡げ、さらに「人固不能」から文章の最後までで、その具体例を一般化して主張している。

最後の反語を含んだ抑揚形の一文に着目。「自分のことはわかりにくいものだ」という自戒の念を肝に銘じる、という内容が中心となる。